

国語教育湧水の会

熊本大学 河野順子

「国語教育湧水の会」は、熊本の小学校・中学校の先生方が集い、児童・生徒の側からの国語科教育のあり方を真摯に学び合い、創造している会である。

私が熊本大学に赴任し、県の国語教育研究大会などに出席させていただくたびに、現場の先生方から、現在国語科教育において何が問題となり、何をこそ目指していかなければならないのかという理論的な指針を知りたいとの要望をお聞きすることがたびたびあった。一方、私自身、実践現場出身の研究者として地域の中で何をしなければいけないのかということを模索し始めていた。

そのとき、私自身、恩師の中渕正堯先生が代表を務めていらつしやる「国語教育探究の会」や「国語論究の会」で、実践者と研究者が協同で学び合っていくことの営みの重要性を体験していたことに思い当たった。そして、会員の一人として、何よりも、継続して研究会を進めていくことこそが、地域の国語教育のために必要なのだということを感じた。中渕先生は、学長という激務の立場でいらつしやうたときでさえも、一度も欠席されることなく、会員と共に一人一人の学習者を基点とした教育のあり方について静かに、しかし、熱く語っていらつしやうた。先生がそこでおっしゃってくださいました二つの言葉が私の印象的に残っている。「出席すれば勉強にな

る」。その言葉の通り、実践者と研究者が共に学び合う会であった。そして、「継続すること」継続してこそ、その学び合いは高まっていくのである。その恩師の言葉を思い起こしながら、学習者の側からの教育を志す実践者の方々四、五人で発足したのがこの「湧水の会」である。

その後、教育への熱い思いをお持ちの先生方、少しでも授業力を高めたいと願う先生方が集うようになり、会員は三十名を数えるようになり、毎月の会には、十四、五名の方々常連として集うようになった。その熱心な取り組みに私も多くのことを学ばせていただいている。会の活動が軌道に乗った一年後には、みんなで会の名前を考えようということになり、熊本市立清水小学校の天野和也先生の命名によって熊本大学の大学祭「湧水祭」にちなんで「国語教育湧水の会」と決まった。そこには会が地域の教育の発展に根ざした営みをしていこうという願いがある。

現在、会が発足してから丸四年が過ぎ、五年目に入っている。開会数もちょうど五十回を迎えている。来年早々には、「国語教育湧水の会」の初めての著作である『入門期の説明的文章の授業改革』（明治図書）が公刊されることになっている。

会員は、市内の小学校、中学校の公立校の先生方、熊本大学教育学部附属小学校、中学

校の何人かの先生方をはじめ、教育委員会の指導主事や管理職などである。それぞれ多忙な身でありながら、本研究会に集まってきて、厚みのある議論を展開している。その中に学生たちも参加し、大学の授業だけでは学ぶことのできない現場実践について、現場の先生方から学ぶことのできる貴重な学びの場となっている。

若い世代から、学校現場を支えている中堅の世代、そして、学校現場を牽引すべき位置にあるベテランの世代というように、世代を超えて学び合うことができるのがこうした私的な研究会の良さであろう。会員の中には、昨年度、本年度と熊本県の教員功労賞を受賞された先生がいらっしやる。本年度受賞された熊本市立壺川小学校の佐藤俊幸先生、市の国語教育研究会の事務局をされている熊本市立碩台小学校の原輝智先生が会の事務局として、会の取りまとめをしてくださっている。

研究会の内容としては、現場の先生方の実践発表とそれをめぐって、ときにビデオ視聴も交えて、考え合うことを中心に行っている。研究授業へ向けて授業案の検討や教材解釈の仕方などについても会員の要望に応じて取り入れている。さらに、国語科教育を取り巻く様々な実践情報や研究情報を河野が提供したり、また学生たちの卒業論文や修士論文の発表を取り入れたり、また、時には現場での悩

みを率直に語り合ったりしながら、学習者の側からの授業実践のあり方について学び合っている。

はじめの三年間は、教師主導の授業からの脱皮を図るべく、対話型授業のあり方について議論を進めていった。

今年、説明的文章に関する本を公開するということもあり、説明的文章の学習指導に關しての議論が中心になった。

○二月 「どうぶつの赤ちゃん」の教材研究  
学習者の側からの授業を構想する上で、学習者の側に発見のある読みを創りだすために、どのような教材研究をすればよいかについて、全員で意見交換を行った。

○三月 「どうぶつの赤ちゃん」の実践発表  
熊本市立本荘小学校 橋本須美子先生  
熊本市立松尾東小学校 梅田智子先生  
形式と内容を止揚した学習指導の実現を目指す実践発表。子どもたちの赤ちゃんの頃をおうちの方に聞いてきて自分たちの成長の記録と比べながら読み取る活動、この説明文には「まとめ」がないことに注目してそのまとめを子どもたちなりに書かせることによつて、比べるという論理的思考力を効果的に育成しようとした工夫など、たくさんの工夫が見られる発表であった。

○四月 思考力を育てる学習指導の工夫

熊本市立山ノ内小学校 水田裕子先生

「すがたをかえる大豆」など複数の教材を基点にして、子どもたちが分類の思考を働かせながら書く活動と関連させようとした学習指導についての発表。先生の子どもに寄せた思いがとてもよく伝わった実践発表だった。

○五月 内言指導に重点をおいた「話すこと・聞くこと」の指導―論理的な構成や展開を考える話し手・聞き手の育成をめざして―

熊本大学教育学部附属中学校 中川豪太先生  
上手に話す力を育てようということから型にはまった外言指導を行いがちな中学校の話すこと・聞くこと指導の現状に対して、他者との関わりにおける内言指導の重要性について取り組んでいることについての実践発表。

・アニメシオンの手法を取り入れた「読むこと」の指導法の研究

西合志町立西合志南中学校 平野忠先生  
平野先生は主体的に学習することが難しい中学生が楽しく学習できることを大切に、生徒を育てたいという願いのもと、文学的文章の学習指導にアニメシオンの手法を取り入れた取り組みを行ってこられた。年度は説明的文章の学習指導にも広げて、批判的読みの可能性を探っている。先生の意欲的な取り組みに、中学校実践への希望が膨らんだ。

○六月 「じどう車くらべ」実践発表

熊本市立小学校 小山恵子先生

入門期の児童であっても、筆者の見方・考え方。述べ方(自動車の「つくり」と「はたらき」を関連づける)を読み取ることが可能であることを、会員一同が考え合った実践だった。

○七月 「とりのくちばし」実践発表

熊本県上益城郡甲佐町立乙女小学校

濱本竜一郎先生

子どもたちが、納得できる読みを生成するために、「行為する」ことの重要性を指摘した実践。どの子どもも鳥の嘴の違いを実感できるように写真を使った絵を読み取る活動を導入し、その次に、嘴を粘土で作ることによって、子どもたちの認識は実感的に捉えられ、それを、身近な道具と比較することによって、嘴の働きの科学的な認識に迫ろうとする意欲的な発表だった。

○八月・九月

『入門期の説明的文章の授業改革』の最終的な仕上げとして、執筆者全員の先生方の原稿の読みあわせを行った。

○十月 六年読書の世界を深めよう「森へ」の授業実践についての発表

熊本市立西原小学校 中川由美子先生

写真家星野道夫さんの作品を教材化したものを対象にした授業実践である。私は授業も参観させていただいたが、子どもの実態をし

っかりと看取った教師だからこそできる対話型の授業であった。

○十一月 全国大学国語教育学会の自由研究発表(熊本市立本荘小学校の橋本須美子先生、熊本市教育委員会指導主事相山範夫先生たちとの共同研究)の内容「入門期におけるコミュニケーション能力の育成に関する考察」について、河野が発表を行った。

中学校のほうでは、「分析」と「解釈」を統合した生徒の側からの授業の可能性について、熊本市立東町中学校の高木雅子先生が提案を行った。

○十二月 読書の世界を広げよう「千年の釘にいとむ」の実践発表

熊本市立武蔵小学校 大塚真実先生

文章に表れた筆者の見方・考え方・述べ方を題名・構成・具体例から読み取らせた活動で読みの視点を明確に持たせながら、子どもたちが読み取ったことを議論し合い、読み深めることを目指した実践。対話を中核に、交流し合いながら学ぶことの意味を子どもたち自身がよくわかっている子どもも主体の授業であった。大塚先生の真摯な毎日の取り組みが目に浮かんできた。

継続は力なり。とにかく、学び合っていくことの大切さを、年代を超えて、そして、実践現場とそれを支える大学(理論)との連携を通して、共有している。先日、会員のある

一人の先生から、「湧水の会のメンバーの話が最近高まったことを感じる」という言葉が出た。一回一回の時間は限られてはいても、継続の中で力を蓄えていくことが、学習者の学びへと生かされていくことを念じている。

本研究会は、学習者の側からの授業実践を目指している人たちに開かれた会である。国語の授業実践に迷っている人、わからなさを抱えている人、そして、新しい方向を求めている人、共に学び合いましょ。

連絡先

熊本大学教育学部附属小学校 井上伸円

電話(096) 356-2492  
FAX(096) 356-2499

E-mail shinen@educ.kumamoto-u.ac.jp  
熊本大学教育学部 河野順子

電話・FAX(096) 342-2583  
E-mail kawano@educ.kumamoto-u.ac.jp